

川 田 順 造 著

『無文字社会の歴史——西アフ

リカ・モシ族の事例を中心に ——』

岩波書店 1976年 282ページ

I は じ め に

本書が直接に素材として取扱っているのは、西アフリカ内陸の小国、オート・ボルタ（人口約430万）を構成する部族の一つ、モシ族（人口約210万）の諸王朝の歴史である。しかし、それを素材とする著者の論考は、人類学のみならずひろく社会科学の基本的な諸問題に及んでいる。

著者はフランス政府の給費留学生としてパリに留学し、フランスにおけるブラック・アフリカ研究の総帥的地位にある、G・バランディエ (G. Balandier) のもとで学んだのち、1962年12月、はじめてモシの国を訪れる。それ以来、1975年9月まで前後7回、通算で5年あまりを現地でのフィールド・ワークに費やしている。そして第1回の本格的調査が終わった段階で著者は、まずブラック・アフリカ研究においては本場というべきフランスで自分の研究の成果を世に問うべく、1971年 *Genèse et évolution du système politique des Mossi méridionaux (Haute-Volta)* (「南部モシ族（オート・ボルタ）の政治組織の生成と発展」) を学位論文としてパリ大学に提出する。しかし、その過程で日本語を母語とする著者の中に「日本語で表現したいという欲求」が芽生えてくる。フランス語で学位論文を書いていて「母語でない圧倒的な不自由さから、書いていてたえずはみだしてゆくものがあり、それを方法論上の問題や、日本人がアフリカ社会を研究する上の基本的な問題として、より一般化した形で日本語で文字にしてみたかった。だから書きはじめると、文字が指から溢れるようにこぼれおちて、体裁などのことはあまり考えずに筆をすすめた。」（「あとがき」277ページ）という。

II 本書の構成と内容

本書は、「1. はじめに」と「20. おわりに」をはさんで、以下の18の小節からなっている。

2. 非文字史料の一般的性格
3. 文字記録と口頭伝承
4. モシ族の場合
5. 系譜の併合
6. 絶対年代の問題
7. 歴史の始点
8. 反復する主題
9. 口頭伝承の定型化
10. 首長位の継承
11. 歴史伝承と社会・政治組織
12. イデオロギー表現としての歴史伝承
13. 歴史伝承の「容観性」
14. 歴史伝承の比較
15. 制度の比較
16. 発展段階の問題
17. 「伝統的」社会という虚像
18. 神話としての歴史、年表としての歴史
19. 文字と社会

著者は第1節「はじめに」で、本書における著者の基本的視角を要約して、それは「旧来の東洋史、西洋史の枠の中でつくられてきた概念や方法を、文字社会の『辺境』として無文字社会に拡大しあてはめようとしたり、あるいは文献史学の単なる補助資料として、無文字社会の伝承をひろいあげることにはなく、むしろ、少しずつでも、無文字社会の歴史の性格をあきらかにすることによって、逆に、文字を用いる社会を、人類学の中での特殊な発展形態として、位置づける」ことであり、「それはひいては、『近代』というものを、深い根の部分から堀りおこす。挺子のひとつのささえともなりうるだろう。」（2ページ）と著者は期待している。

第2節、第3節で無文字社会の基礎的な史料として口頭伝承の性格が一般論として序論風に論じられたのち、第4節では、著者の直接の研究対象であるオート・ボルタのモシ族の概容が紹介される。モシ族の場合も、植民地化前の歴史については、文字記録、考古学的遺物の類は皆無に近く、わずかに口頭伝承が唯一の史料として存在するだけであるという。そしてその「伝承の保持者である故老がつぎつぎに死に、慣行も次第に変化しつつある現在、口頭伝承、とくに王の系譜の採録と比較検討、現在の観察やききとりで知りうる社会組織、王をめぐる儀礼や慣行等の注意深い分析によって、可能なかぎり仮説構築の作業をすすめることが急務である」（25ページ）

という認識が、著者の現地でのフィールド・ワークの動機の一つとして説明されている。そして著者の直接の研究上の関心に則していえば、その目的は、「無文字社会の政治組織の発展をあとづける何らかの手がかりを」（27ページ）得ることにあるという。

第5節「系譜の併合」以下、いよいよ本論に入るわけであるが、各小節は一つの全体の中に構成的に配置されているというよりも、それぞれの小節が、モシ族の諸王朝の歴史を中心的素材として上記の各主題のもとに展開される論考からなる独立した小品という趣が強い。それらをあえて区分すれば第14節までと第15節以下の諸節が若干、性質を異にしているといえよう。すなわち、第14節までの主題は、たとえば口頭伝承だけに依拠して絶対年代を推計する方法（第6節）、諸族の歴史的な権力的な地位（征服民か被支配者か）と、彼らの歴史認識の「深さ」（ここでは、歴史の起点が年代的にどれだけ昔にさかのぼって意識されているかというほどの意味）の差異との関係（第7節）、あるいは歴史伝承がそれを保持する社会の支配的イデオロギーをどの程度、反映しているのかという問題（第12節）など、どちらかといえばモシ族の諸王朝の歴史伝承という素材と、その扱い方をめぐる諸問題が論じられている。これに対して第15節「制度の比較」以下の諸節は、それ以前の諸節が発表（1971年）されてから、2年あまりの時間をへだてて書きつがれた（全体の構想は1971年段階ですでにできあがっていたそうであるが）こともあってか、どちらかといえば社会科学一般の基本的な分析概念など方法論の問題（第15～17節）、あるいは「神話と歴史」、「文字と社会」に関する一般論（第18、19節）の性格が濃くなっている。第15、16節あたりでは、「国家」、「土地所有」、「生産様式」などマルクス主義的な方法概念についても言及されている。

というようなわけで、本書が取扱っている問題はきわめて多岐にわたり、またそれらの問題がさまざまな水準で論じられているために、その内容を全体的に要約し紹介することはむずかしい。そこで、ここでは第13節「歴史伝承の『客観性』」に限って、その内容を紹介しておきたい。全体の中で、第13節がとくに代表的な節であるというわけではないが——というよりもその内容といい語り口といい他の諸節にくらべるとむしろ特異な感じをうける節であるのだが——この節には本書の底を流れる著者の基本的な考えが、なまのかたちで示されているようにおもわれるからである。

第13節で著者は、まざいギリスの人類学者ナデル(S.R.

Nadel)の所説を引き、ナデルが「イデオロギー的歴史」から「客観的歴史」を区別しようと主張している点について、ナデルの「客観性」とは、「ナデルの属する『社会の内部』の視点からみられたものにすぎない」（116ページ）と批判する。つづいて著者はトインビーを引き、主題はいわゆる西洋中心主義史観の批判に移ってゆく。

「そうした（ヨーロッパの——引用者注）勢力の拡張と技術の優越、多くの社会に対する植民地支配の中で獲得され蓄積された膨大な知識が、『見られて』だけいて自己主張を投げかえす手段さえもちえなかった社会のひとつひとつが、黙って抱きかかえてきた知識よりも、参照の体系を構成する上でより豊かで広範囲にわたっていることはまちがいあるまい。また、近代西洋世界による、空前の規模の侵略と収奪を可能にした、武器をはじめとする技術の優越が、西欧世界に、その知的規準を「普遍的」と自認する根拠を考えたこともたしかであろう。だが、近代西洋に視点の中心をおいた自称『世界』史が、いろいろあくどいことをやりながら立身出世した有力者の自叙伝でないかどうかを、しつこく疑ってみる必要があることも、たしかである。」（118～119ページ）という。

ここで著者は、自分が「身にしみて」そのことを感じとった「パリ大学のアフリカ史ゼミナールの体験」を紹介している。「故国の歴史を学ぶために、旧宗主国のフランスまで来て、フランス語の本を読み、フランス人の教師から教えてもらわなければならないアフリカの学友たち——かれらは、祖先からうけついできた郷土の生活感覚では、どうしても肯定できないような解釈をフランス人のアフリカ史の権威から「教え」られても、その反撥をうまく表現するすべさえしらず、たどたどしく反駁を試みても、たちまち圧倒的に巧みなフランス語で、かずかずの『客観的』な資料をあげてやりこめられ、不服をかみこらして沈黙してしまうほかはないのだ。こうした場面にあわせたり、かれらのやりばのない憤懣（それでもかれらはフランスで「免状」をもらって帰国しなければならぬ羽目におかれている）をうちあげられて、私まで焼きごてをあてられたような痛みを胸に感じたことが何度あったことか。」（119ページ）

しかし、著者は第2次大戦後になってぼつぼつ現われてきたアフリカ人自身の手になるアフリカ史研究の諸成果にも不満である。「古代エジプト文明が、西アジア高文化の影響によってではなく、黒人アフリカの文化を基盤にして成立した」というディオップ(C. H. Diop)の主張などに代表されるように「いずれも地道で綿密な基

礎研究のつまかさねの成果というよりは、傾向性のつよい性急な主張という性格のものであるだけになお、既成の価値の権威にすがろうとする基本姿勢の弱々しさがめだつ」(120ページ)という。

他方、デヴィッドソン(B. Davidson)に代表されるような「ヨーロッパ人の『アフリカびいき』による『アフリカの再発見』」に対しては、著者の批判はさらに手きびしい。このような「『再発見された暗黒アフリカの輝かしい過去』の呪縛」(121ページ)から解放されないかぎり、真のアフリカ史研究は成立しえないと著者は熱っぽく語る。

しかし、著者の「西洋中心主義」に向けられた批判のほこ先は、そのままアフリカにとっては「一介の外来者」にすぎない著者自身にはねかえってくることを、賢明な著者は知っている。それに答えて著者は自分自身の役割を次のように規定する。「私は外来者として、モシ族のさまざまな王朝や異なる階層や、モシ族と類縁関係をもつ諸族の人々のなかに、その人たちにとっても十分対象化されずに潜在している歴史を、たがいに比較し、関連させ、私の仮説的な解釈をふたたびモシ族の人たちにもどして考えてもらうという作業を気ながにつづけながら、かれらの歴史を顕在化する触媒の役割をはたすことができれば、と思う。」(122ページ)

III 評 価

「日本の文化人類学は、本書によってはじめて真に世界的達成をとげたのである」。これは朝日新聞の書評子が本書によせた讃辞である(『朝日新聞』1977年2月14日付)。また本書の内容が雑誌『思想』に連載されていた段階で、本書は民族学関係の研究を対象にしている渋沢賞を受賞している(第8回、1975年度)。日本のアフリカ研究という場で考えてみた場合にも本書は、近年の最大の収穫の一つに数えられよう。本書がこのように高く評価された理由としておよそ次の点があげられよう。

第1に、本書の基礎となっている5カ年あまり(本書に直接関連する調査は3カ年)にわたる著者の精力的な現地調査がある。自分の手で歴大な一次資料を収集し、採録することによって、著者は日本だけでなく、西欧の研究の場においてもいわばモシ族のベン・ナバ(語り部の長)の地位を獲得しえたことを本書を示している。60年前にフロベニウス(L. Frobenius)が採録したモシ諸王朝の系譜伝承と著者自身が採録したものとを比較検討

する過程で、両者の差異とその差異の意味を発見した喜びを著者は語っている(39~41ページ)。また、マンブールシ族の一分枝が枝分れして現在のモシの国に移動し、やがてワガドゥグ王朝を形成するにいたる経緯に関して、これまでもっぱら中部モシの伝承だけに依拠して構築されていた通説に対して、著者は自ら採録した南部モシ諸王朝の伝承を補うことによって新たな一つの仮説を提示するまでにいたっている(126ページ)。

第2に、それらの現地調査の成果がそのままモシ族に関する情報として提示されているのではなく、川田氏流にいえばきわめて豊かな広範囲の「参照の体系」の中に位置づけられて、政治人類学を中心としたより一般的な問題状況と関連づけられて提示されているということがある。著者が本書に付した250点にのぼる「参考文献」リストは、そのことを如実に示している。本書の中で批判的にその所説が言及されている欧米の研究者も、レヴィ・ストロース、マリノウスキーをはじめとし、枚挙にいとまがないほどである。

そしてこれらの内容が、すでに『マクレブ紀行』(中公新書 昭和46年)、『曠野から』(筑摩書房 1973年)などすでに定評のある著者独特のエッセイ風の文体でつづられている。「筆者」という用語とは別に「私」という一人称を用いて、随所に著者の個人的体験や感想などを巧みにおこみ、本書の叙述にやわらかさとふくらみを与えている。このような文体は、一面、問題を論理的に掘り下げるといふ点では、マイナスの役割を果たしている面がなくはないが、本書がより広範な読者を獲得することに寄与していることは疑いない。

IV 一 つ の 疑 問

本書を一読して私にとってもっとも興味深く印象に残ったのは、第13節「歴史伝承の『客観性』」であった。そこでは本書の基調ともいふべき著者の西洋中心主義批判が、他の節とは異なり、もろになまのかたちで吐露されているからである。同時にそこで熱っぽく語られる著者の西洋中心主義批判に、私はうなずけないものを感じさせられた。

著者の激しい批判のことばに耳を傾けていると、そもそも著者は近代西洋人の歴史認識の客観性にあまりに期待をよせすぎているようにおもえてくるのである。たとえば著者は飯塚浩二にならって「コロンブスがアメリカを『発見』したと平気でいう、大部分の西洋人や、そう

した歴史観を西洋の学問と一緒にうのみにしてあやしまないわれわれ日本人の多くの自称知識人……」(117ページ)と皮肉っているが、私は、コロンブスにとっては、あるいはアメリカに対してコロンブスと同じ立場にある人びとにとっては、それは「発見」であったにちがいないとおもうのである。「近代西洋に視点の中心をおいた自称『世界史』が……」(118ページ)と著者はいうが、そもそもどこにも視点の中心をおかない歴史認識などありうるのだろうか。川田氏が日本語で「われわれ」と書くとき、とくに「われわれ日本人」とことわらなくとも、彼がそこに含ませているのは、最大限日本人だけであろう。だからヨーロッパ人が「われわれ」というとき、その「われわれ」にヨーロッパ人だけしか想定していなかったとしても、彼らをせめるわけにいかないのではなかろうか。西洋中心主義史観が、地域・時代をこえた客観の幻想を生みだしてきたとするならば、少なくともその責任の一端は、非ヨーロッパ世界の側にあるのではない。

さきに引用したように「パリ大学のアフリカ史ゼミナール」の場で、同席した「アフリカの学友たち」の「やり場のない憤懣」に著者は強い共感を示しているが、私は少なくとも著者によってとらえられたかぎりでの「アフリカの学友たち」の「憤懣」に著者ほどには共感できない。とくにこのエピソードが著者の西洋中心主義批判の文脈で挿入されてくるのがわからない。「アフリカの学友たち」が有文字的に「祖国の歴史」を学ぶためにはパリに来なければならない状況が存在するとしても、それは西洋中心主義史観そのものの欠陥とはいえないだろう。「アフリカの学友たち」がアフリカに固有の文字で書かれた「祖国の歴史」書が存在せず、母語によって有文字的な「祖国の歴史」を学ぶことができない現状をなげいているのであるとしたら、そういう蓄積を残さなかった自分たちの祖先をうらむしかない。アフリカ人として生まれたことを悔やむしかない。そもそも彼らは、母語で書かれた歴史書の存在しないアフリカに生まれたことを悔んでいるのだろうか。彼らが自分たちの運命を悔んでいるようにみえたとすれば、それは彼らが「西洋近代の尺度」をうけいれたか、あるいは外側の「西洋近代の尺度」をもった目にはそううつるということであろう。

ところが著者は、「アフリカの学友たち」を西洋中心主義の一方的な犠牲者に見立ててしまい、その分だけ、著者の西洋中心主義に対する批判の語り口には熱っぽさが加わっているようにおもわれるのである。そしてまさ

にその熱っぽい語り口の中に、著者の批判する西洋中心主義が浸蝕してきているように、私にはおもえるのである。

「文字がなく、歴史もない暗黒大陸の烙印を押され、ただ『見られる者』として生きることしかできなかった黒人アフリカの人々」(120ページ)と著者はいう。黒アフリカに固有の文字が生まれなかったのは事実であろう。ヨーロッパ人が「歴史もない暗黒大陸」と考えたのも事実であろう。しかしだからといってアフリカ人が、「ただ『見られる者』として生きることしかできなかった」というのは真実だろうか。これもヨーロッパのサロンの中だけの話でしかない。彼らはそこでのおしゃべりには加わらなかったかもしれないが、彼らもまた「近代」を「見て」生きてきたはずである。またバオバブの木蔭でそれを語り合ってもきたであろう。著者自身の「近代」を「深い根の部分から堀りおこす」ために、「無文字社会」の人びとによって生きられ観察された「近代」を探索することこそが、まさに著者の基本的ねらいではなかったのだろうか。

(調査研究部 原口武彦)